

…… 歯科医療崩壊 ……

歯科技工士が立ち去ったあとに

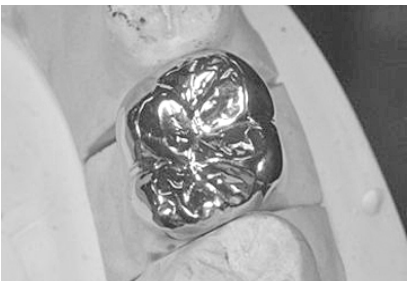
虫歯になっても

治す「んが」がなくなると？

歯科技工物を作る歯科技工士

歯に詰めたり被せたりする金属やセラミック、入れ歯などを歯科技工物と言う。歯科医師は、歯が抜けたり、欠けたりしたところにこの歯科技工物を入れて、口腔の機能を回復させる。歯科医療を行う上でなくてはならない重要なものだ。

きちんと機能し、簡単に壊れたりせず、見た目も良くする優れた歯科技工物を作るには、専門的な知識と高度な技術が要求される。このため、日本では歯科技工物を作るのは、歯科医師と、法律で定められた国家資格をもつ歯科技工士だけだ。歯科技工士の資格は、専門学校や大学での2年から4年間の専門の養成過程を経て、国家試験に合格して取得できる。



現場から立ち去る歯科技工士

今、この国家資格を持った歯科技工士が現場から次々と立ち去っている。卒業後5年間で75%の歯科技工士が離職する（日本歯科技工士会調べ）。2年以上もの養成学校を経て、取得する国家資

格で、これだけ離職率が高い職種はそう見当たらない。なぜ、歯科技工士は立ち去っていくのだろうか。

歯科技工物の可能性

歯科技工物はひとつひとつが手作業で作られる工芸品だ。咬み合わせを考え、口腔内できちんと機能し、審美的にもバランスよく長期間保つようにつくもの工程を経て、何度もチェックを繰り返して作られる。

歯を全部覆う金属でできた全部铸造冠は、熟練した歯科技工士が早朝から深夜まで限界まで働いたとしても十分な質を維持して製作できるのは一日10個が限度とされる。咬み合わせや歯並びの状態などにより、製作はさらに難しくなり、この一日10個という数字はすぐに下がる。

適正な歯科技工物を装着し、口腔機能を回復することで、寝たきりだったお年寄りが、自分の足で歩きはじめるといふ事例も報告されている。歯科技工物は全身に大きな影響を及ぼす可能性もある。

歯科技工物の向こうにいる患者さんのことを考えれば、より良い物を作りたいという歯科技工士の想いは強い。

支払われる技工料

歯科技工士は「健康保険の仕事では安くてやっていけない」と言う。

歯にかぶせる金属製の全部铸造冠物の場合、委託元の歯科医院から支払われるのは、1,500円から2,500円の技工料(工賃)(みんなの歯科ネットワーク調べ)と金属代の実費だけだ。

売り上げである技工料の1,500円から2,500円のうち、消耗品、機械の償却費、配達、事務費などの諸経費が700円から1,400円かかる。1個当たりの収入はわずか100円から良くて1,100円程度だ。一日あたりの収入は多い時で1,000円(1,100円×10個)しかない。どれだけ丹念に作ったとしても、支払われる金額は変わらない。

売り上げ一日一万円の時

現場にいる歯科技工士に聞けば、売り上げ一日一万円の壁があるとと言う。全部铸造冠や、白いセラミック、入れ歯など充分な物が作れる十年以上のベテラン歯科技工士でも、まともにやっていけば、売り上げは一日一万円の壁を超えられないという。収入ではなく、売り上げが一万円だ。卒業間もない未熟者ならば半分以下、5,000円か、これ以下の売り上げしか上げられない。この売り上げだと経費を除けば、手元に残らないどころか、持ち出しとなる。

委託する歯科医師も払おうにも払えないのだ。歯科では20年以上、診療報酬がわずかしか値上げされていない。このため、技工料の値上げも行われていない。20年間の物価上昇を考えると、実質的な収入は半分以下になっている。

歯科技工士が失うもの

この一日一萬円の壁を越えるには何かを吹っ切る、いや、捨てなければならぬと、歯科技工士は言う。

時間・健康・家族・仕事の質・信用・友人・笑顔・やりがい、そして自分、職人の心……失うもの、手放すものが増えれば増えるほど売り上げも伸ばせると言う。手を抜けば抜くほど儲かるが、心は折れる。

こんな希望が持てない現場ならば、若い人が逃げ出すのは当然だろう。離職率が75%もあるとい

うのも納得できる。介護の現場から、介護職員が逃げ出しているのと同じ構図だ。

こんな話を聞けば、この就職氷河期の今でさえ入ってこようと思わないだろう。やりがいがあっても生活が成り立たない。だから、近年、歯科技工士養成学校への志望者が激減している。高校の進路指導でも、食えない職への進もうとする生徒には再考を促す。そして、志望者がいなくなった養成学校が定員割れをして、次々と閉鎖されている。

若い人が入ってこなくなったことにより、現役の歯科技工士の平均年齢の高齢化が進んでいる。数年後には、就労する歯科技工士の激減が予想されている。



歯科技工士が立ち去った後

歯科技工士がいなくなると、歯科医療の現場は困らないのだろうか？ 歯科医師は技工物が手に入らなくなると困らないのだろうか？ 歯科医師は、歯科技工士がまったくいなくなったら困るだろう。しかし、現在、歯科技工の委託先に困っている歯科医師はいない。

今、う蝕（むし歯）はどんどん減少している。削って、詰める、被せるといふ、今までの歯科治療そのものが減っている。さらに経済不況が歯科の受診抑制を起している。この結果、歯科技工物の需要は減っている。結果として、ただでさえ安い技工料は、価格の

切り下げをしてきた。そうしなければ仕事にありつけない。現状では歯科技工士は過剰なのかもしれない。

厚生省告示は独禁法違反

こうした惨状は今始まったことではない。昭和六二年に厚生省が当時の歯科技工物の実勢価格に基づいて算出された適正金額の目安として、診療報酬の7割という数字を示したことがある。しかし、告示で技工料を拘束することは独占禁止法に抵触する。

診療報酬は公定価格、技工料金は市場価格という制度の矛盾が、歯科技工士の置かれた立場を苦しめているのだ。

効率化は何を捨てるのか？

ここまで過酷な現場に、まだ踏みとどまっている歯科技工士だが、それでも、世間からも、歯科医師からも「ムダが多い」「もっと安い歯科技工物を」「ユニクロ的な逆転の発想を」と求められている。

歯科技工物の製作はファーストフードのようにシステム化するには限界がある。

歯科技工物にはミクロン単位の精度が求められる。量産品のように、同じものを何個も作って精度を出すわけではない。老若男女咬み合わせ、残った歯の状態、個人個人に合わせて正確に機能して、さらに審美性を追及した最適な形態で、さらに精度を出すものだ。数ミクロンの誤差が、患者さんの口の中や全身に予想もつかない悪影響を及ぼすこともある。

いくら職人気質と言っても、霞を食べて生きてはいけないのだ。守らなければいけない家族もある。1個あたりに支払われる金額が定められている以上、どこかで折り合いをつけなければならぬ。職人の、匠のプライド「質」にも手を付けざるを得なくなる。

偽装、一番困るのは誰だろうか

こうして食品偽装と同じ事が起こる。

パチリと入ったものが入らなくなる。過不足なく入っていたものに隙間ができる。長期間もったものがもたなくなる。歯科技工士の疲弊は、歯科技工物のこんなところに現れてくる。見た目は同じでも非なるものが出来てくるのだ。

歯科技工士のこのような状況が続いて不幸になるのは誰なのだろうか。志（こころざし）半ばで立ち去る技工士なのか。歯科技工物が手に入らなくなってしまう歯科医師なのか。

一番困るのは、良質な歯科医療を受けられなくなってしまう患者さんなのだろうか。

歯科技工士の問題は、歯科医療関係者だけではなく、物を食べ、声を発し、息をする口腔をもつ、日本に在住するすべての人の問題なのである。



2010/02/19

みんなの歯科ネットワーク
ASAHA! & TEAM T.S.T.

